【一口メモ】

○吉川元春（きっかわもとはる）

戦国大名となった毛利元就（もうりもとなり）の次男。
母親の実家である吉川氏を相続。
吉川氏は現在の北広島町北部地域を本拠とする国衆（くにしゅう）（有力な領主）で、元春が当主となって以降は、大名毛利氏のもとで主に山陰方面の軍事指揮を担当しました。

○実名（じつみょう）

中世の人々が元服（げんぷく）（成人）して名乗る名前。
名付け親の後字をもらって
実名の前字とすることが多い。
実名と同時に「仮名（けみょう）」（通称）も、もらいます。
実名や通称は変わることがあります。
元服前は「童名（わらわな）」を名乗ります。

例えば…

吉川元長（もとなが）　（童名）鶴寿丸（つるじゅまる）

↓ 元服

（実名）元資

↓ 改名

元長

少輔次郎（しょうのじろう）（仮名）

↓ 任官

治部少輔（じぶのしょう）

○ここに登場する児玉氏

児玉就忠（なりただ）は毛利元就の奉行人（ぶぎょうにん）（官僚）、
元良（もとよし）は毛利隆元・輝元の奉行人、
春種（はるたね）は吉川元春の奉行人として活動しました。

○花押（かおう）

サイン・自分の署名（自署）。
現代では、クレジットカードの裏に記したサインを本人確認のために使いますね。
花押もそれと同じ役割をします。
年をとったり、立場が変わったり、
あるいは偽造防止のため、
花押を変えることがあります。

【一口メモ】

〇百貫（文）とは…

中世後期の中国地方では、村の規模を「〇貫（文）（＝〇石）」と表しました。厳密に検地して測ったわけではなく、「だいたい〇貫（文）＝〇石くらい」とおおまかに示したのです。

ちなみに…

百貫文（＝百石）の規模とは、一段（約一、〇〇〇㎡）当たり五〇〇文（＝〇．五貫＝五斗）の年貢を収納したと仮定すると、二〇町（約二〇ha）の面積になります。これは、マツダスタジアムのグランド18個分に相当します。

【一口メモ】

○椙原保（杉原保）

京都にある石清水八幡宮に伝わる文書により、

・椙原保が備後国にあったこと、

・荘園領主が石清水八幡宮であったこと、

などについては、すでに知られていました。

しかし、今のどのあたりなのかについては、

謎のままでした。

通説では、椙原保を「苗字の地」とする椙原（杉原）氏の子孫である木梨氏が、現在の尾道市木ノ庄町・原田町付近を本拠としたことから、そこが椙原保の有力な推定地となっていました。

今回、胎蔵寺の文書が発見されたことにより、

椙原保が今の福山城跡周辺地域であったことが判明し、

謎が解けました。

【一口メモ】

○「一行（いっこう）」とは…

・文章の終わり（書き止め）が「一行如件（いっこうくだんのごとし）」となっている文書を、「一行」と呼んでいました。

・殿様（主人）が、家臣（従者）に対して所領を与えたり、家督の相続を認めたりするとき、正式の証明書として「一行」が作成されました。

・「中世文書を読む（一）」で紹介した吉川元春の手紙（〈天正十二年〉三月晦日付け）や、毛利輝元の手紙（天正十二年三月二十一日付け）は、所領を与えたり、家督の相続を認めたりするときに作成されたものですが、あくまで“内々の約束”にすぎません。このような、“内々の約束”に用いる文書は、「御捻（おひねり）」と呼ばれました。

・書き止めが「一行如件」でなくても、正式の証明書として作成されたもの（例えば、前回の展示資料）は、「一行」と呼ばれました。

○「下文（くだしぶみ）」とは…

・文章が「下（くだす）」から始まる文書を「下文」と呼んでいました。

・地位の高い人・機関から、地位の低い人・機関に対して“下す”文書です（上意下達（じょういかたつ）文書）。

・平安時代から使われ（例えば、官宣司（かんせんじ）・摂関家政所（せっかんけまんどころ）下文・院庁（いんのちょう）下文・国司下文など）、鎌倉・室町幕府でも使用されました（将軍家政所下文・将軍下文）が、次第に使われなくなりました。

・周防・長門両国を本拠とする大内氏は、戦国時代にも使用しました。